

MUGENDO

# MaruSon

Part1

Sample

For Adults Only

## 警告！

本作には過激な性的表現や暴力、反社会的行為の描写が含まれています。しかし作者にはそのような行為等を肯定・推奨・助長する意図はなく、作品自体にもそのような力はありません。

本作では現時点で作者に可能な限りの精緻でリアリティのある表現を心がけています。それはイラストレーションやコミックををも上回る、禁断のバーチャル体験を味わってもらうことを意図した作者の試みです。実際の行為とは別次元で、作者は作品の主人公と価値観を共有していません。

また本作の扱う領域は少年愛やショタと言われるジャンルに属します。

以上より、

- ・そのようなジャンルに興味・理解のない方、まして嫌悪感を抱かれる方。
- ・未成年及び実年齢に関わらず精神的に未熟な方。
- ・現実と虚構を区別できない方。しようしない方。

は、これ以上先のページに進んではいけません。

以上を理解し、興味を抱いていただけたらなら、ぜひとも禁断の世界を、心ゆくまで楽しんで頂きたく存じます。

2012 年 3 月 3 日    とりさん拝

# Marason Part1(sample)

とりさん

以下本編より抜粋。書式は本編と同一です。あなたの環境で正常表示できるかご確認下さい。本編には伏せ字はありません。

## 1

正月三が日が明けて、僕は再び日課の早朝ジョギングを開始した。もともと、二日は仕事だった。僕は入院病棟のあるわりと大きな総合病院の勤務医だ。……中途半端な二日に仕事が入ってしまったせいで、旅行もできなければ深酒もできなかった。まあこんな年もあるさ、と思いながら、特に気持ちを切り替える余裕もなく、新しい年を迎えたわけだ。

それでも今は何とかやれそうな気がしている。いいこともある。入院や長期の療養を経てある程度長い時間接した患者や家族とは、信頼関係ができ、尊敬や感謝もされる。

僕は少年愛者だ。僕が一番好むのは■期ちよつと手前から■くらいまでの少年だから、患者の男の子の多くはいささか幼すぎるのだが、それでも好みの子との接触はそれなりに楽しめる。元気になった時が別れる時、というのはこの職業の宿命的なつらさだが、僕好みの、いわば将来有望な幼い男の子が手を振ってさよならをしてくれて、後に年賀状が来たりする。そこには男の子の住所と氏名と、感謝の気持ちが載せられている。今のところそこから何か続きがあった試しはないが、いずれはあるかもしれない、とか考えるだけでも少しは幸せな気分になる。

とにもかくにも医者も体力勝負。からだを壊したら終わりだ。そんなこともあって、サラリーマン医者生活二年目から、早朝ジョギングを続けている。ただもちろん夜勤明けは休むし、二日酔いの日だつてある。無理をしないのも継続の秘訣だと思っている。アスリートを目指すわけじゃないんだから。

そんな中で僕は、もう二年ほども、気にし続けている子がいた。いつも父子で走おやこっていて、初めて会った頃は■、■年生に見えた。短髪の時もあったが、少し髪が伸びると柔らかな癖毛で、ウェーブした黒く健康な髪が眉にかかっていたり、額に貼りついていたりした。愛らしい丸顔で、二重のくりくりとした目をしていて、幼い頃は今よりもつと頬がぷっくりとしていた。色白で、走って血の巡りがよくなっているの、頬がいつもほんのり朱く染まっていた。夏場はランニングシャツで走っていることもあったが、それだと腕や首のあたりも、白い肌が朱に染まり、汗がにじんで、シャツは素肌に貼り付いて、エロチックだった。今も丸顔は変わらないが、■期が近づき、少しずつからだつきは幼児っぽさ

から抜けだして、毎朝のジョギングの成果もあってか、特に腰から太腿あたりは、ジャージの上からでもしっかりしてきたように見えた。でも全体としては、細身ではないががっちり型には遠い、しなやかな感じの肉体だった。

彼は歳のわりには小柄なんだろうと思う。実際の歳を知らないから、本当は何とも言えないのだが、ずっと父親（よく考えればこれも確かめたわけではないが、普通に考えればそうだ）との対比で見えたせいで、そういう印象があった。何しろ父親は軽く一八〇を超える（僕との対比だ。僕はやつと一七〇超えくらい）、平凡な体格だった。身長の上に、豊かな肩幅をして、ジャージの上からでもその筋骨逞しい肉体が想像できた。肌は浅黒く、あるいはそれは人工的なタンニングの成果かも知れなかったが、あらゆる点で息子と似ていない父親だった。最初に出会った時は、その滑稽なまでの対比のために、少年が幼児のように見えた。でも何度も会えばさすがに■■■■年生はいつていると判断した。からだのバランスや顔つきなどを見てだ。僕だつてだてに小児科医を何年もやつていない。

父親は、少年の年齢からしても、僕よりちょっと年上程度なんだろうけど、巨漢の上に熊みたいな髭面で、二人並べば貫禄負けは明らかで、かわいい男の子を連れていることも相俟って、僕は彼にちょっと嫉妬を感じていた。

僕は性的に目覚めた中学生くらいの頃から、男の子の方が好きだった。あの父親みたいに家庭を持つことはまずない。女で勃たないわけじゃないから、結婚をし、子どもを作ることは可能だけれど、そういう根本的な部分でパートナーを偽り続けて生きるのはフェアじゃないと考えている。それに僕には、



もっと重大な問題がある。はっきり言って、僕は少年への欲望を抑えて生きる気がない。■■■の頃には後輩の■■■と交わり、医大生の頃には、家庭教師先の■■■学生と繰り返し性行為をした。時には軽く時には濃厚に。罪悪感なんてまるでない。今でも受験に成功した彼らは、僕と交流を持っていて、■■■の頃の相手の子はゲイになったみたいだけど、他の子はストレートのままだ（まあ厳密にはバイだが）。彼らは僕みたいな人間をよく理解する大人になってくれるだろうと期待している。でも一般社会的にみれば僕は法を犯し続けていて、この方面の違法行為には特に、最近の法そのものも、世間の目も厳しい。妻子がいたらとても今みたいな生き方はできない。でもそれはやっていることを悪いと思っっているからじゃない。

僕の問題まだ深い。僕は先にも述べたように平凡な体格で、大人同士ではあまり印象に残らない、穏やかで、優しい顔をしている。いや、僕は実際に優しくして穏やかだ。患者の子も母親も、すぐに安心してくれる。僕は丁寧に対話する。少年と接する時もそうだ。常に優しいお兄さんやおじさんであり続けた。でもセックスが佳境に入ると、スイッチが切り替わってしまうことがしばしばあった。

河沿いの道で毎朝のようにすれ違う少年は、そんな僕をささやかに魅了し続けた。でも彼は最初に出会った頃、僕の対象としてはいささか幼すぎた。もちろん、あれだけかわいければ、言葉は悪いが食えないことはない。でも彼はいつも父親と一緒にいたし、現実問題として声をかけることすら無理だった。いつも反対方向から同じコースを走る彼らに、何度目の邂逅からか僕は片手を挙げ柔和な微笑みを送り、髭面の父親が手を挙げて会釈してくれ、少年が恥ずかしそうにちょっとだけ頭を下げる。そうして数秒

ですれ違う。それだけのことだった。

ところが。

ここ半年ぐらいだろうか、彼が一人で走るのを見る機会が多くなった。父親の仕事が忙しくなったか、変わったのかもしれない、と僕は勘ぐった。

その上彼は、僕にとつてたまらなく魅力的な発達段階に達していた。■年生としても小柄な方だろうが、幼さの中にも男の子から少年への移ろいの過程の危うさ、そろそろ主張し始める大人の筋肉の気配、第二次■の訪れるか訪れないかの瀬戸際、それらが僕を強くとらえはじめ、そして僕はとらわれ続けた。もう生えただろうか、精通はしただろうか、と、すれ違う度に足の進みを遅くして、振り返り、妄想してしまう。また彼は幼児の無表情さ、男児の無邪気な表情を通り過ぎて、ここ最近はどこか憂いを帯びた暗い表情をしていた。一人で走っている時にそれは顕著で、謎めいていて、僕を惹きつけてやまなかった。

僕は実際には使ったことのない、危険な道具をたくさん持っている。その使用を妄想する。いつか一線を超えてしまうだろうという危惧を抱きながらも、道具は増えていっていた。

年明けの日曜日、僕はとうとう、流れ次第では一線を破ってやろうと決意し……

この場所を選んだのは僕の「優しさ」だった。

僕は、からだを返して仰向けになり、膝を抱えてうめく少年に歩み寄り、かがんで、「大丈夫かい？」と白々しく声をかけた。穏やかで優しげな表情と口調で。

少年は顔をしかめ唇を噛みながらも、

「大丈夫……です……」

「痛い！ 痛いッ！」

少年独特の掠れた高い声が僕を高ぶらせる。彼は怪我のせいだと思っているだろう。でもくるぶしの焼けるような痛みは……

「具合が悪いみたいだね……」

僕は少年にまたがり、頬に手を添え声をかけた。

「あ……ふ……」

ろれつが回らないだろう……



「大丈夫かい？」

僕はベッドに寝かせた少年の顔を覗き込んで、白々しく訊ねた。頬は紅潮し、目つきは覚束ない。そろるな。

……明日もたぶん走れる。僕がこのあとすることにもよるだろうけど。

「名前訊いていいかな？」

「■……大樹<sup>ひろき</sup>です」

知らない人に名前を教えちゃいけない。最近の学校ではたぶんそう教えている。登下校時、名札もつけさせない。でも少年はフルネームで答えてくれた。医者という肩書きと、僕の温厚そうな表情が、役立っているわけだ。

おや、早生まれか。年齢の見込みは当たっていたが、学年は思っていたより一つ上だった。ずいぶん小柄な■年生だ。話し方はかなりしゃきつとしてきた。礼儀正しい子のようにだ。それにいい声だ。体格相応の、男の子としては高い声で、少し掠れた、そそる声だ。

「大樹君、僕に見覚えはないかな……」

僕は、僕は大樹君の顔に、覆い被さるように近づいた。少年は「え……」と戸惑ったあと、急に口を押さえ

「きもちわるい……」

「大樹君は覚えてないかも知れないけど、たぶん何年も前から、朝、しょっちゅうすれ違ってるんだよね。挨拶もしてくれてる」

「……お医者さんだったんですね……」

大樹君はちよつと驚いたように言った。もちろんまだ、僕を疑いもしない。むしろこの一瞬、信頼と安心は高まったかも知れない。

「おお、覚えていてくれたんだね。うれしいよ。前から一度君と、遊びたかったんだよね。僕は君みたいなかわいい子が、好きだから」

後半のセリフを理解するには、かなり時間がかかるはずだ。

……少女と違って、自分がある種の大人の性対象になるなんて感覚は、■学生の男の子にはほぼない。

「騒ぐなよ。ちよつと遊びたいだけなんだから。大人しくしてればお互い楽しめるはずだよ。少しはね」

大樹君は顔を左右に振った。恐怖に見開かれた二重の双眸から、涙があふれそうだった。その表情は僕をとて興奮させた。

「そりや残念だな。僕はゆつくり遊びたいのに。でも大樹君が大きな声を出さずに、大人しく何でも言うことを聞いてくれれば、早く帰れるよ。苦しい思いもあまりしなくて済むだろうね……」

ここらでようやく、■学生男子の大樹君にも、僕の性的な意図が少しずつ伝わっていつているだろう。少年の腹部は柔らかい。幼い、薄い脂肪に覆われて、外見上、腹筋の「割れ」はまだ露出していないが、強く撫でると、筋肉の発達を感じ取ることができる。シャツをさらにまくり……

「んむむ！」

一度解放してやると、ショックで見開かれた目から、また涙があふれていた。

……彼は全身に力を込め、からだを突っ張らせて手足をいろんな方向に伸ばしてもがき苦しんだ。  
「い、た、い……」という悲痛な高い声を聞かせてくれた。そう、痛いのだ。

「先生の言うこと、何でもききます……」

痛いことしないで、と言われても今度はこっちが約束を守る自信がない。

……少年は今、大切な部分を一つ、犯されたのだ。

……大樹君は目を閉じて、強い刺激には、「ん、ん！」と唇を噛んだまま声を漏らし、鼻から荒い息を吐いて反応した。身を振らないと耐えられない時もあるようだった。性器は今はしっかりと勃起し、ボクサーブリーフの一部を湿らせているようだった。どう見ても感じているようにしか見えなかった。

「……オナニーは、知ってる？」

間があつたが、大樹君はちゃんと目を開いて僕を見ていて、答える気はあるように見えたので、少し待った。

「知ってます」

「したことは？」

「友達が教えてくれたの？」

興味津々だな。

「……でもたぶん何か悪いことしてる気がして……」

「じゃ、始めて……」

僕はベッドから降りて、立って腕組みして、大樹君を見下ろした。大樹君は薄目で僕と、自分の性器

を交互に見て……、

まだ頂点に上り詰めるには早いのだ。

「もう少し我慢だ。いいね？」

大樹君はまたうなづく。洗脳を受けた囚人みたいに。

「お仕置きって……」

大樹君はちよつと首を持ち上げて、不安げに僕を見つめた。

### 3

「気持ちいいのかな……？」

「痛い……」

大樹君は本当に苦しげな顔で、うめくように僕に訴えた。僕はその言葉と表情にドキリとした。胸が締めつけられるような、それでいてたまらなく高ぶらされるような、二律背反の気分だ。

……天国のような地獄のような体験だ。僕はこの若い少年の、健康な肉体を穢し、通常この歳で味わうことのない、異常なゾーンの激しい性体験を無理矢理与えて、彼のセックスに対する感覚を狂わせてしまいたい……

終わる頃には君はもう別の人間になっている――

叫ぶように声を上げながらも、語尾を丁寧語にする大樹君は、とても愛おしかった。

……いつまでもその快感の淵に沈んでいたいかのように。

相変わらず凡庸で、人の良さそうな顔だった。でも額には汗がにじみ、気持ちの高ぶりは隠せない。悪意の顔れについては、僕自身にはなんともわからない。

## 4

「何、するんですか……」

手錠をかけた手首を引っ張り、ベッドの頭側の金属の柵に、手錠のもう一方の輪をかける僕を見上げ、



大樹君はまだ気怠い声で訊いてくる。暴力を加え、陵辱を加え続ける僕に、彼は丁寧語を崩さない。それは僕への畏怖心からというより、彼の人柄とか育ちによるものだろう。あるいは、教育とか。

「僕が君にやってあげたのを、まねしてがんばってくれればいいんだ。まさか嫌だとか言わないよね？」

## 5

「セックスって知ってる？　もしかして性交って習うのかな」  
ちよっと間があった。でもぼそぼそと答えてくれた。

「授業あったと思うんですけど、僕休んでたと思います……」  
ふむ。

大樹君はいちいちうなずいているけど、少し目が泳いでいるように見えた。子どもなのにセックスしてしまった（無理矢理させられたんだが）ことに、ショックを受けているのかな。

「ひつ、痛っ……」

高く掠れた声で悲鳴を上げると、大樹君は足を突っ張って、苦しげな表情を見せた。

「あ……抜いて……下さ、い」

ガチャツって手錠が鳴った。

それはやはり少年の禁断の領域に踏み入り、穢れない（なかった）こころを犯す行為だからだ。

「イツ……た！ 痛い……せ、先生……抜いて！ 抜いて、下さ、い！」

大樹君はかなり強く、悲痛に苦痛を訴えた。からだを振っていた。そこまで痛いはずないと思うけどな。

「まだ準備だよ。こんなところでやめるわけないだろう？」

「もつともつと拵げてあげようか」

頭を上げた大樹君は首を振った。涙がつつと流れて、ふつくらした頬を伝った。

本当はやめるとか嫌だとか言葉にしたいんだろう。でも言っても無駄だし、逆効果かもしれないと、大樹君は理解している。賢いね。

「あ、あ。先生！ 先生！」

何か訴えようと大樹君はがばっと上半身を持ち上げた。手が拘束されているから、動きには限界があるけれど。

そうだ、それでいい。その方が、楽で楽しいからね。落ちて行け。

## 6

一方的に責められて身を振ったり力んだりしていただけたような中でも、結果的には僕より大樹君の方がよっぽど運動している。その証拠に、彼は汗びっしりで、色白の肌を全身紅潮させて、疲れ切っているんだから。

急に大樹君が、

「あああアッ！」って、かなり大きな声を出したので僕はどきつとした。隣に聞こえちまう。

「ちよつとくすぐったいかも知れないけど、動かないで」

「読める？」

と訊いてみた。

「どれい」

迷いがなかった。不確かな記憶をたどるというような答え方ではなく、確実に知っている言葉を言う答え方だ。隸なんてなかなか難しい。もちろん■学校では習わないだろう。

「すごいな。よく知っている。でもニュアンス的には物と言うより、家畜に近いかな。主に労働力として売買される。前世紀まではかなりの先進国にも堂々と奴隷制があったし、今だって実質的な奴隷生活をしている人は世界中にたくさんいる」

僕は立って、腰をかがめ大樹君の顔を覗き込んで、単刀直入に狂った提案をぶつけた。笑顔で、穏やかに。

「でも僕はそんなことをしたいんじゃない。たぶんする必要もないと思っているんだ。君は賢い子だからね。それに礼儀正しい。答えを聞こう。あまり時間はあげられない」

「おやおや、大樹君は実は嘘つきかも知れないね。まあいい。これね、僕のが大きくなった時より細い  
だろ……」

どうするか見ものだ。彼は左手でそれを握り……

その視線の意味は、僕には理解できなかった。

## 8

この子は、僕には現時点で理解できない、秘められた性質か事情を持っている。僕はそう思った。約束が守られれば、それは次第に明らかになるだろう。

「いいだろう」

でも僕の予測を超えた展開が、待ち受けているような気がした。それは予感だった。

**続きは本編で！ 本編は94P。8章。約五二〇〇〇字。Part2に続きますが、単  
独でも楽しめる内容となっています。**